

ケーテ・コルヴィッツ
「私の夫、カール・コルヴィッツ (1942年)」— 試訳
Mein Mann Karl Kollwitz (1942) : Käthe Kollwitz, Die Tagebücher, 1908-1943.
hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989.

稲 福 日出夫

訳者まえがき

以下に訳出を試みたのは、Käthe Kollwitz: Die Tagebücher, 1908-1943. hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989. 所収のMein Mann Karl Kollwitz (1942), ss. 748-751. である。

この手記の著者ケーテ・コルヴィッツは、1867年、東プロイセンのケーニヒスベルクで生まれた。父親はカール・シュミット、母親はカタリーナ。ケーテには4歳年上の兄コンラートがいた。その兄と同年で、兄の学生時代の友人が、後にケーテの夫となるカール・コルヴィッツである。1891年、ケーテが24歳のとき、二人は結婚した。結婚後もケーテは版画家、彫刻家として活動し、夫カールは医者として労働者街の衛生や医療に従事した。二人の息子が誕生した。が、1914年、次男ペーターは第一次世界大戦で戦死した。1940年、ケーテの夫カール病死。前年に罹った肺炎が原因であった。カールが死去した2年後、長男ハンスの息子、ケーテからいえば孫にあたるペーターが第二次世界大戦で戦死した。

息子に続いて孫まで戦争で奪われ、失意の中にあったその頃、ケーテは息子ハンスの求めに応じて、自らの生い立ちやその周辺のことを書き綴っていた。ケーテ、75歳の頃である。ここに訳出を試みた「私の夫、カール・コルヴィッツ」も、当時の草稿の一部であり、おそらく公刊されることを念頭に置きながら推敲を重ねるといった原稿ではないだろう。この手記が収録されている彼女の『日記』の編者ユッタ・ボンケ-コルヴィッツは、戦死したケーテの孫ペーターの妹にあたる。なお、訳者は、本誌前号で、ユッタの記したこの『日記』の「序文」を紹介したことがあつ

た。「ケーテ・コルヴィッツ『日記』「序文」― 試訳」(『沖繩法政研究』第13号、125-168頁、2010年)。

前号で、佐喜眞美術館の所蔵するケーテ・コルヴィッツの版画を中国で展示する計画が進められているという新聞記事に触れた。この夏、その計画が実現した。今年、コルヴィッツの作品のもつ精神性から深い影響を受けたといわれる魯迅の生誕130周年、また中国の新興版画運動80周年にあたる。魯迅の故郷である浙江省美術館では「佐喜眞美術館所蔵 ケーテ・コルヴィッツ原作展」が8月17日から9月13日まで、北京魯迅博物館では「琉球・佐喜眞美術館コレクション ケーテ・コルヴィッツ」が9月17日から10月9日まで開催された。魯迅博物館での開幕式で、佐喜眞道夫館長は「青年時代に魯迅と出会い、その書物である『深夜に記す』でコルヴィッツを知った。人間に対する深い洞察と愛情を持つ作品は沖繩の魂とつながり、励ます力がある。ケーテは沖繩によく似合うと夢中になって集めた。小さなコレクションが磁場となり、新しい東アジアの平和をつくる大きなイマジネーションとなることを願う」と述べた、という。その開催初日に中国、韓国、台湾、沖繩(川満信一、仲里効、佐喜眞道夫)からの参加者が集い、魯迅とコルヴィッツをめぐって記念シンポジウムが開かれた。そこで議論された内容については、『沖繩タイムス』2011年9月18日、「東アジアを結ぶ沖繩」(『沖繩タイムス』9月26日~28日)、『琉球新報』9月27日の紙面で知ることができる。シンポジウム開催前の『琉球新報』8月25日、『沖繩タイムス』8月31日の記事も参照。また、『沖繩タイムス』9月26日の「魚眼レンズ」では、佐喜眞美術館の上間かな恵学芸員の中国での展示作業にまつわる苦労話なども紹介されている。

話をこの手記に戻すとー。ケーテが夫カールのことを、思い出すままに淡々と綴っているこの手記は、カールに対する愛情の深さと同時に、ケーテの清廉な人柄を窺わせる内容である。また、コルヴィッツ夫妻は、夫カールの妹リースベトと、階は違うが同じ建物の中で暮らしており、日常的に顔を合わせていた。彼女は教師であった。この手記は、そのリースベトにも触れており、ケーテの生活を知るうえで参考になるように思われる。さらには、短い文章ながらも、読み進めるなかで、ケーテの版画や彫刻から受ける印象と同様、人生に向き合う彼女の態度の中に或る種の宗教的な響きさえ聞こえてくるような回想記となっている。(2011年10月14日)

ケーテ・コルヴィッツ「私の夫、カール・コルヴィッツ（1942年）」

私の夫、カール・コルヴィッツ（Karl Kollwitz）は、1863年、東プロイセンにあるルーダウ（Rudau）という町で生まれました。

カールの母親（1826年生まれ、1878年プロイセンのケーニヒスベルクで死亡）は東プロイセン（フィッシュハウゼン郡Kreis Fischhausen）に古くから住みついた「ケルマー（Köllmer）」一族のダンネンベルク（Dannenberg）の出であった。

カールの父親は、母親と同じく1826年生まれ。皮革職人の親方であり、居酒屋の主人でもあった。カールの祖父は、ルーダウで鍛冶屋を営んでいた。ルーダウでのコルヴィッツ一族の家系は、それ以上遡って知ることはできない。

コルヴィッツ家は、それこそ出産を繰り返す家庭であった。しかし、それは当時にあつては、言うなれば、家族の中で幾度も幼児洗礼の祝い事があるが、しばらく経つと今度は幼児の葬儀がおこなわれるといった、喜びと悲哀の感情が交互に起こったことを意味する。最年少のふたりの子供、つまり、カールと妹のリースベト（Lisbeth）だけが、幼少期を無事に育ち、成人していった。カールの父親は、愛情に満ちた人物で、たいへん陽気な性格の持ち主であった。その父親が生きているあいだ、カールの幼少時の思い出は幸福に包まれたものであった。とりわけ、父の部屋の片隅にあった「青色の壺」は、カールの記憶に鮮明に残っている。カールの父親は、カールに対して厳しく、怒りっぽいところもあったのではあるが、それでも、カールは父親を心から愛していた。子供のころの思い出としては、父親に棒で殴られたことなどがなまなましく記憶に残っているが、しかしまた、無邪気な子供らしい冒険談といったエピソードも数多くカールの心に刻まれていた。

それぞれの人生へ乗り出すまえの誰もがもっている愉しくも短い序曲も、カールの場合、父親の死によって終りを告げた。肺炎であった。ルーダウ近郊で大火事が起こったとき、父親はその消火活動にあたっていたが、そのさいに患った肺炎が命取りになった。

青色の壺に代わって、「白色の壺」が置かれるようになった。母親は、少年カールの心が荒んでしまうのではないかと、ひどく心配した。そこで、母親は、カールを村の学校に入れるのではなく、彼の教育を村の牧師の個人教授に委ねることにし

た。ちょうどその頃、カールの叔父にあたるエヴァート (Ewert) がルーダウに移り住んでいたのも、教会の聖歌隊長であった彼のもとで教育を受けさせることにしたのである。当時のカールの夕べの祈りは、いつも、「愛すべき神よ、どうぞ私が悪さをしないようにお導き下さい」といった願いで締めくくられた。しかし、そうした祈りに反して、彼の「悪さ・非善行」(Nichtguttun) はとどまることがなかった。殴り合いのけんかをしては家に帰ってくる。そうした行動が日を増すごとにますますひどくなっていった。いきつく果ては、それに対応するかのようになり、より厳しいあらたな体罰がカールを待っていた。というのも、母親はカールに対して、そのような厳しい態度で臨まなければならないと思っていた。

カールの9歳の頃、母親は意を決して、母子家庭であった彼をケーニヒスベルクにある王立の養護施設に預けた。そこは、デンボウスキ御爺さん (der alte Dembowski) が指導していた施設であった。

母親は、カールの手を取ってその養護施設へ入っていったのではなかった。カールは、ひとりだけでその施設に送り出された。母親にとって、カールと別れることはとても辛かったので、カールの背を押すと振り返ることなくその施設を後にした。母親が立ち去っていったことを知ったとき、カールは激しい郷愁の念にかられ、ホームシックが彼を襲った。気の毒に思った或る少年が、カールに少年向けの本をプレゼントした。その本が、カールの当初の悲しみを、少しだけ癒してくれた。

カールは、9歳の頃から、主としてその養護施設で暮らすことになった。彼は、そこでの生活から多くの恩恵を受けている。仲間が少年たちだけという環境は、結局、彼にとって好ましいことであった。質素で厳しいスパルタ式の教育は、彼を鍛え上げるようになった。その結果、その後の人生に起こってくる様々な苦難に直面しても、カールは挫けずに耐え抜くことができたのであった。

デンボウスキ御爺さんはカールを可愛がった。御爺さんは、しばしばカール宛てに届いた母親の手紙を彼の前で読み上げて、敬虔な母親の態度を褒め称えた。

カールは、その養護施設に途切れることなくずっと居たというのではなかった。また、カール自身、後年母親の死に直面したさい、ここでの生活ではもはや将来へ備えるにはじゅうぶんではないという思いも抱いていた。カールは、その養護施設からヴィルヘルム・ギムナジウムへ移ることを考えていた。が、彼の後見人であつ

た叔父のダンネンベルク（Dannenberg）、つまり、ルーダウ近郊のラプタウ（Labtau）に住み、その大地主であったダンネンベルクは、カールの教育に関して、あまり関心がなかった。それで、その決断をカール自身に任せたのであった。当時のカールは、母親の死後しばらくして、ふたたび施設へ戻り、その後そこを去って、やっとの思いで上級の学校へ進んだのであった。そうした環境にあつて、カールはヴィルヘルム・ギムナジウムを卒業し、大学入学資格を得た。

母親が亡くなった頃が、カールと妹リースベトふたりの兄妹にとって、もっとも苦労の多い辛い時代であった。

カールの母親は、9人の子供を産み、そして埋葬した。結局、彼女は最後の10番目と11番目のふたりの子供、カールとリースベトの少年少女期の成長を見守ることができたのであった。ルーダウから出てくる際、母親は、ギンバイカの苗木をその地の牧師のところへ持っていった。そして、その牧師の庭で、その苗木が枯れることなく生育するよう手入れをお願いした。その木が生長をつづける限り、子供たちもまた、すくすくと育ってくれるだろう、という願いが込められていた。

「青色の壺」は売却され、金銭に換えられてしまった。そのように工面して得た資金をもとに、一家はケーニヒスベルクに引っ越していったのである。

ケーニヒスベルクでの、たいへんつましい暮らしが始まった。母親は、二人の子供にはひと助けができる職業に就けるような道に進み、存分に学ばせてやりたいと思っていた。カールは医師か牧師に、リースベトには教師になってほしかった。

一家がいつ頃ケーニヒスベルクに引っ越してきて、その後何年母親がそこで生活していたのか、そのことを私は知らない。彼女は、結局、1878年に亡くなった。母親が亡くなった頃には、カールは施設を出て母親や妹と長期にわたって一緒に暮らしていたのかどうか。そのことについても私は知らない。ただ、しばしば母親が夜中に激しい発作を起こし、そのたびにカールがあちこちの医者のもとに走りまわり、ともかく誰かを家に連れて来て母親を診てもらったということを、彼は覚えていた。大きな不安にかられて少年があちこち駆けずり回り、やっとの思いで或る医者をもとに連れてくる ― 少年の頃のそうした体験はその後の彼の人生にどのような影響を及ぼしていったのだろうか。そうした体験、少年の願いを聞き入れ母親を診てもらったことに対する感謝の念、その記憶は、終生彼の心から消えることはな

かった。

母親が長期間病床に伏すことによって、家族は、極度に儉約した生活を送らざるを得なかった。その母親が死亡したとき、カールはまだ14歳の少年であり、リースベトは11歳の少女であった。

母親が死んだ後、彼女の兄弟にあたる大地主のダンネンベルクが、カールやリースベトに残された僅かばかりの財産を管理した。もちろん、兄妹は、その後も引き続き質素につましく暮らしていかざるをえなかった。というのも、今後、彼ら兄妹が高等教育を受けるにあたって、こまごまとした諸経費がこれから先も長く必要となってくるからである。

ダンネンベルク一家は、カールやリースベトの通う学校が休暇に入ると、彼らを自宅によんで共に過ごした。他方、授業のある期間は、兄妹はケーニヒスベルクの下宿先で生活することになった。カールは、他にどれくらい若者が自分と似たような境遇にあるだろうか、といったような思いで日々を過ごしていた。カールのいた下宿では、そこの主人は結核にかかっていた。食卓を囲む際には、おのずからその主人に最も多くの食事が与えられた。当時であつては、何はともあれ肉団子は、健康保持のための貴重な代用品としての意味をもっていたのである。下宿時代の苦しみ、その惨めな生活の様子は、ディケンズの小説を思い起こさせる。

或る女子校の女性指導者のもとに寄宿していたリースベトのほうは、あるいはカールよりも少しはましな生活を送ることができていたかもしれない。

この時代、カールは、気持ちがいら立ち、まわりと衝突を繰り返していた。同時にまた、彼は、多くの悪影響にさらされてもいた。

心的葛藤や内的矛盾に苦しむ彼の性格は、おそらくその頃に形作られたのかもしれない。楽しいことや喜びを追い求め、それに浸っている一方で、にもかかわらずすぐさま、責任感が彼の心に重くのしかかってくる。楽しんだ後しばらく経つと、いつも決まってそうして楽しく時間を過ごしたことに対する後悔や自責の念にかられるのであった。

叔父のダンネンベルクからは、たえず咎められるような雰囲気の中、わずかの金銭しかもらえなかった。

その時代に待ち望んだことと言えば、叔父の所有する広大な土地で長期休暇を過

ごすことであった。そこで子供たちは、満足するまで食べ物を口にすることができ、また、農場を手伝う傍ら、田舎暮らしの喜びを満喫することができた。この叔父には4人の子供がいた。ダンネンベルク叔父のもとで過ごす数週間は、カールにとって、両親のもとで過ごすという、もはや失われてしまった日々を、幾分か埋め合わせるものとなった。ルーダウ近郊のザントホーフ（Sandhof）にいくと、さらにそのような感を深くした。そこの牧師の一家には7人の若者がいたが、カールは彼らと親しく付き合っていた。ヴァイス（Weiß）牧師は「多くの若者とともに」暮らしていたが、そのなかの年長者は当時すでに学業を終えており、最年少はまだほんの子供であった。ヴァイスのもとで全員そろって食卓を囲んだ昼食のことを、後年になって、カールは過ぎ去りし日々を懐かしむように回想することがあった。その牧師は、たしかに親分肌的で横暴なところもあったのではあるが、若者たちの面倒をよくみており、彼らときわめて親密にかかわりあっていた。ここでは次々と起こってくる時代の新たな問題のすべてに関心が向けられ、徹底的に論議が交わされていた。ここには刺激的な、若者にとって魅力のある新しい空気がみなぎっていた。カールは、ヴァイスのもとで初めて社会民主主義について知ることができた。年長の3人の若者は当時すでに社会民主主義の支持者で、彼らの討議を傍らでカールも耳にしていたのである。

ハンス・ヴァイス（Hans Weiß）は、当時、ヴィルヘルム・ギムナジウムに在籍していた。彼は、学年ではひとつ上であった先輩たち、たとえば私の兄コンラート・シュミット（Konrad Schmidt）もそのひとりであるが、そうした人々と深く付き合い、彼らは結束していた。ハンスは行動力のある人物であった。彼は、その学友内で社会民主主義を説き、その思想を広めるため行動していた。彼は、ベーベル（August Bebel）『婦人論』の思想に共感し、それを支持した。彼らはラサール（Ferdinand Lassalle）の著書を読んだ。彼らは仲間内で演劇活動もおこなった。

おそらく同じ頃に、カールは、ケーニヒスベルク自由教団（Freie Gemeinde）を知り、その団体ともつながりをもった。その教団の創設者は私の祖父ユーリウス・ルップ（Julius Rupp）であった。1846年に創設されたこの教団は、原始キリスト教の教義に基づいていた。つまり、イエスの教えそのものが教団の根幹をなしていた。

当時、大きなうねりとなってドイツ全土を巻き込んだ宗教運動は、自由教団が依

拋する精神とは総じて異なった精神に基づくものであった。たとえば、ベルリンに起こった運動は、きわめて合理主義的理性主義的な側面をもっていた。それに対して、ケーニヒスベルク自由教団は、そうした合理主義的精神 (Aufklärung) を拒絶した。自由教団が依拠しその根底においたのは、すでに述べたように、唯一キリストの教えのみであった。哲学的には、カントの考え方に連なるものであった。教団の仲間は、毎週1回、集会に参加した。そこには誰でも自由に参加することが許されており、また、どのような宗教的問いに対してもじっくりと議論がなされていた。日曜の催しでは、ルップが、繰り返し何度も人倫的自由に由来する説教をおこなっていた。

思想的には唯物論にかなり近いものの見方をするカールにとって、ルップの人柄やそこに集まってくる人々の個性にはすぐに魅かれたとしても、この教団の思想に共感するにはかなりの時間を要した。教団内部の空気は、当初、彼に対し好意的でなく、あまり芳しいものではなかった。が、その実、彼は教団に集まった人々の精神に一定の影響を及ぼしていたと、私は思う。

いずれにしても、ギムナジウムでの最後の学年から大学入学後の最初の学生時代を通して、その間ずっと働きづめで辛い日々を送っていたカールにとって、教団に通い、そこを手伝うことによって新たな道が開かれることになった。

カールにとって当初、気分の浮き沈みから完全に逃れることはもちろんできなかった。たしかに彼は、将来ひとを助ける職に就きたいという、突き進むべき確固とした目標をもっていた。しかし、その目標に向かうにあたって、障害や難しい問題などが大きくなっていった。カールが抱え込まざるを得なかった借金が彼を苦しめ、圧迫していった。

カールが初めてヴィルヘルム・ギムナジウムに登校したとき、彼は、奇妙な縁で私の家族と知り合うことになる。初登校の日、彼は、クラスで私の兄コンラートと顔を合わせた。若い二人は取っ組み合いのけんかを始めた。その際、コンラートは倒れて腕を脱臼してしまい、家に運ばれた。それから数日間、兄は学校を休まざるを得なかった。当時、カールの下宿先の主人、ベーム爺さん (Böhm) は私の両親の知り合いであったが、その爺さんがカールにこう叱った。「君は今すぐ、シュミット (Schmidt) さん宅 (コンラートやケーテの父親の名前 — 訳注) へ見舞いに行っ

て、君が負わせたコンラートの傷の具合がどうかを尋ねてきなさい」。カールは、しどろしどろ我が家にやって来た。カールが、玄関の扉の呼び鈴を鳴らしたとき、私の母親が扉を開けて、彼に言った。「裏庭にまわってください。コンラートはそこにいるはずですから」。カールが裏庭に行くと、コンラートはやり投げをして遊んでいて、怪我の方はかなりの程度回復していた。二人はさらに遊び続けて、共に時間を過ごした。そして、カールが、そろそろ家に帰らなければならない旨を告げると、私の母親は、カールを叱るのではなくて、おいしそうな梨を彼にもたせてやった。母親特有のそうした愛情に満ちた振る舞いは、カールの人生にとってきわめて印象深いものがあつたようで、カールはそれまで、そうした親愛の情にふれることがあまりなかった。当時、私は未だカールと知り合うということにはなかった。また、怪我をさせたという因縁をこえたコンラートとの友情も、すぐさま終わりを迎えることになる。というのも、カールは、間もなくして施設へ戻ることになったからである。それからだいぶ経って、カールがふたたびヴィルヘルム・ギムナジウムへ通い始めたとき、彼はコンラートと再会し、彼らの友情が復活、その後も親しい間柄が続くようになる。

カールのギムナジウムでの最後の学年から学生時代の1年生の頃、彼は唯物論に傾倒していた。彼は、自由連盟（Freie Vereinigung）と呼ばれていた或る団体に加入していた。それは政党ではなく、おもなメンバーは学生、しかも大部分は医学生生の団体であり、とりわけユダヤ人学生がそこに結集していた。フーゴー・ハーゼ（Hugo Haase）もそこに所属していた。しかし、カールは、学費を借り入れなければならなかった。というのも、彼の叔父が管理していた僅かばかりの資金も底をついてしまったからである。その叔父は、カールが社会民主主義者であることに気付いた。休暇の折りの或る晩、カールは叔父のそばに座るよう命じられ、説教された。そこで叔父が社会民主主義を徹底的に非難するのを聞かされることになる。

しかし、やがてカールは自由連盟から離れることになる。というのも、自由連盟での活動が学業の妨げになるということが明らかになったからである。間近に控えている試験に合格するためには、そこに出入りする余裕などなかった。結局、カールはそこを脱退することになるが、それでも仲間との親しい付き合いはその後も続いていった。

医学部の前期基礎科目終了後の試験を受けるさいには、彼は、病気にかかり田舎で療養していた或る仲間の代役を務めたこともあった。

カールの学生生活は、多くの他の学生のように陽気に学生時代を楽しむといったものでは決してなく、いつも経済的な心配をしなければならないといった境遇にあった。彼の義務感は学生時代のそうした生活環境から生まれてきたものである。彼は、やっとの思いで、およそ若者の周りで起こりうるありとあらゆる困難をくぐり抜けてきたのであった。実際、彼には労せずして手に入れることのできる金銭といったようなものなど何ひとつ無かった。その時代、彼の真の支えとなっていたのは自由教団だけであり、また、彼がそこで出会った人々だけであった。

当初、カールは私と出会い、私たちふたりが互いに人生を結び合わせたことは間違っていたのではないかという思いにかられていた。また、ふたりの暮らしがうまくいっているのかどうか思い悩むことも、彼にとってけっして珍しいことではなかった。長い年月が経つなかで、やっど、明るい朗らかな性格が彼のなかに発揮されていった。それは、彼の患者に対する接し方、疲れを知らない心のこもった診療を通して生まれてきたものであったに違いない。

カールは医者として活動することに心が満ち足りるのを感じた。彼は時間を忘れていつまでも働くことができた。— この点を、私はここでとくに強調しておきたい。

カールのもとにやって来る患者たちは、彼を敬愛してやまなかった。というのも、患者たちは彼の診察に全幅の信頼を寄せていたからである。カールは、実力以上に自分を大きく見せることを嫌った。患者に向き合うときにもそうであった。診察するなかで原因がはっきりしない場合、彼は、自分にはその原因が不明であることをうやむやにして隠すことなどしなかった。そして、その実情をためらうことなく患者に対しても告げるのであった。真実でないことをそれらしく見せようなどということとは、カールにとってまったく無縁であった。私は、しばしば、彼が「患者を治療するさいの指針・方法というのは、あらゆる症状を綿密に先入観にとらわれずに観察する以外にありえないのだ」と言うのを聞いたことがある。彼は、そうした手法で原因を明らかにしていくのであった。だからこそ、彼と患者とのあいだに深い信頼関係が築かれていったのである。彼は、お金が無いということがどれほどひとを圧迫し苦痛を与えるかということ、彼自身のこれまでの人生から骨身にしみて

知っていた。それゆえ彼は、日頃からみずからの患者に対して金銭的な援助もおこなっていたのである。

カールの病状が末期に入り、そして終に帰らぬ人となったとき、彼がこれまで診てきた患者たちにカールがどれほど慕われていたのかということが明らかになった。カールが亡くなった当時、それまでの50年間、彼の診療所があったベルリンの市街区域で牧師を務めていた或る御方が、カールの死後、私にこう告げた。カールが天職（Beruf）として彼を待つ患者たちのところへ出向くたびごとに、人々はカールに寄りすがって離れないのであったが、それは実に目を見張るばかりの光景であったと。― そう語ってくれたのである。

カールに特有の、ひとに対するそのような義理堅さ、みずからの職務・天職に対する忠実さが、老年期を迎え、時が経つにつれてもいっそう彼の心を平穏にし、或る種の敬虔な気持ちを育んでいったのである。カールと関わりのあったひとは誰でも彼のことを、かつて或る人が彼をそう呼んだように「天真爛漫で無垢な」人間（ein unschuldiger Mensch）と感じた、という。